GR
白雲郷

とりみ

30

昭和49年4月1日

鳥居観音

とりゐ 第30号 目次

表紙　白雲山の満開のつつじ

道光禅師御法話(其の十三)……一

父母の恩について(其の四)小林高安……四

インドネシアの旅(其の四)桐　江……七

西　遊　記(其の二五)岡部千三…十二

田　舎　医　者(其の一〇)見川鯛山…十六

寄進者芳名……十九

島居観音だより……二十一

行事

一、つつじ祭り

四月一日より五月末日まで
湯茶の接待あり

一、春季大祭

四月十七日十時三十分より

○写真コンクール

四月二十一日
雨天順延　十時より

○薬師如来開眼式

四月二十三日　十一時より

○花まつり（月おくれ）

五月八日

一、塔婆供養

七月十六日

一、祈　禱

年間常時受付執行します

道光禅師（故高階瓏仙猊下）御法話

仏心のめざめ（其の十三）

一、世界平和のために（昭和四十二年起稿）

私は本年九十二歳になりますが、おかげさまで、丈夫で、耳は大分遠くなりましたが、昨秋はタイ国のチェンマイ市で第八回世界仏教徒会議タイ大会が、開かれるについて、全日本仏教会を代表して、この大会に参加いたし、つづいて曹洞宗主催のインド仏蹟巡拝団の名誉団長におされて、お釈迦さまのご霊蹟を親しく巡って、おまいりしてきましたが、まことにありがたい、しあわせなことだと感謝しております。

昔であったならば、年寄は申すまでもなく、若い人でも、はるばるインドの仏蹟を巡拝するなどと云うことは、生やさしいことではなかったのに、今は飛行機や自動車と云う、速くて便利なものが発達したおかげで、楽々と世界旅行ができるようになり、月の世界へも旅行ができそうないわゆる宇宙時代に入ったことは、人智のすばらしさを物語っておりますが、こうした科学知識の進歩発達にくらべて、道義心とか宗教心と云う、精神面のはたらきが伴なわず、とくに科学兵器を使用しての、残酷な戦争行為がくり返されているとは、まことになげかわしい現状であります。

世界仏教徒会議は、その当初から、世界の平和と人類の福祉は、仏陀釈尊の慈悲と平和の教えによって実現することを強調し、これをくりかえして宣言してきましたが、現に仏教国であるベトナムが、南北にわかれて長期にわたって戦争をつづけていることは、いかんにたえません。これは、戦争をしているのか、させられているのか、現地の人々は実に気の毒であります。ベトナムの仏教団体は、平和のために、仏教の立場から活動をつづけていますが、そ

の理想が容易に実現しないところに、大きななやみが存するわけであります。

しかし、その理由のいかんを問わず、戦争と云うものは、大量の殺人行為であってみれば、不殺生を第一の戒めとする仏教にそむくことで、云うまでもなく、他の生命をうばうと云うことは、わが方にひきくらべて、とうてい忍びがたい残虐なしわざであり、野蛮なる暴力でありますから、一日も早く止める努力をいたすべきであります。

二、アショーカ王と仏教

釈尊の滅後、およそ二百年ごろ、インドのマカダ国に、有名な阿育（アショーカ）大王があられて、仏教を大いに興隆されましたが、この王が、そもそも菩提心（ほとけ心）をおこして、仏教に帰依せられた動機は、カリンガ国との戦争で、十数万と云われる多くの戦死者や、戦災、戦禍の惨状を眼のあたりに見て、いたく後悔し、ふたたびこのような悲劇を、くりかえさないと誓って、戦争抛棄を宣言され、深く仏の教えに帰依（信ずる）して、その信者となり、教団の一員となり、熱心に宣教を行ない、また、みずから仏蹟を巡拝されたのであります。その順路は、学者の研究によると、王宮である華氏城（パータリプトラ）を出て北に向かい、ヒマラヤ山の近くを西に折れ、現在ネパール国の領土になっているルンビニーの仏陀（釈迦）誕生の地に詣で、さらに、ここから迦毘羅城を過ぎて、ベナレスに近いサルナートに詣でました。ここは仏陀（釈迦）が五人のお弟子のために、はじめて説法（教をとく）をした鹿野苑の遺蹟であります。それから、仏陀が好んで滞在した舎衛城。成道の聖地ガヤー（仏陀伽耶）入滅地クシナガラを巡礼して、すべての聖地に寄附をあたえ、記念の石柱を建てられた――とあります。ルンビニーにある記念の石柱は、二千三百年後の今日においてもなお存していて、碑文の文字もあきらかであります。

このほか、阿育王は広大な領土であったインドの各地に、石柱や磨崖（自然の岩石を磨いた崖）に、

法勅（釈迦の教え）をきざんで、仏法によって、悪行を滅じ、善行を増し、慈愛、施与、真実、純潔なることを教えて、国内に仏の教えを宣揚するとともに、国外にも伝道僧を派遣して、慈悲と平和の教えを弘められました。セイロン国に仏教が伝えられたのも、王の時代であったと云われております。

なお、インドにおこった仏教が、世界宗教として、今日発展したその原因には、この阿育王が戦争を抛棄して、仏心にめざめ、菩提心をおこしたことが、大いにあずかって力があるものと信じます。このたび、仏蹟を親しく巡拝して、王の偉業を併せしのび、今日の世界をかえりみて、感慨うたた深いものがありました。

日本の現状をかえりみて

広く世界の現状を見まするに、今なお動揺常なき国際政情の不安定ななかにあって、ひとりわが日本が、戦後二十余年、ともかくも、平和を維持し、産業の発展による生活の向上を実現しつつあることは、身をもって核兵器の恐ろしさを経験した国民の、ひたすらなる平和への悲願と、あらゆる文化面へのたゆまざる努力とによって、獲ち得た幸福にほかならないのであります。

しかるに俗にいう「のどもと過ぎて、熱さ忘るる」のたとえにもれず、近頃一般に、無事の平和になれて、個人的には、物資ゆたかな生活にもあきたらず、いたずらに欲望をほしいままにして、心に足るということを忘れ、かえって自らなやみ、自らくるしむ結果を、招いているように思います。

また社会的には道義のはいたい、一部青少年の非行問題、さらには常軌を逸した凶悪犯罪の発生、学園の暴力占拠など、どう見ても健全な精神文化が、物質文化、科学知識にともなっていないことが、しみじみと感じられます。今日一々例を挙げなくても、だれしも同感のことと思います。これでは、国家の将来が思いやられます。政治の倫理化、政治家諸公の反省を始めとして、一般国民の公衆道徳の尊重、人命尊重、福祉施設の完備等……以下次号

父母の恩について（其の四）

小林高安

仏説父母恩重経

本号から父母の恩義について首題の経典に基いて述べることに致します。

現代においてこの重大な事柄が以外に人々の心から軽視されて親にも子にも関心の薄い結果が今日の社会の乱れを生じた主因であると存じます。

恩義を感ずるところに感謝の念を生じ、思いやりの気持が生れます。このことは人類の社会生活上の基本倫理であり、規則や法律以前の問題であります。最近の教育に修身や道徳の課目がないからと云う向きもあります。それも理屈の一つかも知れませんが、それが無いから仕方がないとはなりません。私共がよりよい社会生活を希望する裏付けとしての不可欠の重要な問題であり、この心構えなくしては目的を得ることはできません。

その欠陥は現実に社会生活に表われております。親が子を捨てたり殺したり、子が親を捨てるばかりか、尊属殺害等のいまわしい悲惨事まで発生しておるのであります。

斯かる事実の中から他人ごとでは無いことを痛感し、社会共同体を構成する一員として自覚を高めるためにも、今一度現在世に享受しておる自己の生命の由来を顧みて、そこから自分にどの程度の感謝の心構えがあるや、なしやを点検し、相互扶助の精神を深めることが、自他の利益の根元であることを悟ることが最も肝要であると存じます。

そのためには人事ではなく、自分の身近なところに糸口を見詰めるのが大切であると存じますので、親孝行であられた釈尊の説かれた父母恩重経を根拠として申し上げます。

観音信仰に生きるものの当然会得すべき菩薩行の基本でもありますから付言いたします。

釈尊は或る時に王舎城の耆闍崛山の道場で説法をされた時各方面から多数の人々が聞法のために集り、一心に仏のお顔を仰ぎ瞬きもせず、熱心な体度で待っておりました。

その時釈尊説法の第一声に一切の善男子よ善女人よ父に慈恩あり、母には悲恩がある。その理由として、人間のこの世に生れるには「宿業を因とし父母を縁とせり」宿業とは過去の永い間に積み重ねられた原因があって、それが父と母の縁によって生れたのが因縁である、因果の法則を解かれたのである。

更に「父にあらざれば生まれず、母にあらざれば育たず、気を父の胤にうけて、形を母の胎に托す」と人の生れる基本について説かれ、この様な因縁によって生れ出た子に対する「悲母の子を念う愛情は世の中に比較するものが無い、その恩は赤形にも及ぶ」とあるのは子供の出生以前から良い子が五体満足に恙なく生れることを、念願する深い深い愛情を指してのことであります。

「始めに胎を受けしより、母は十月を経るあいだ、行、往、坐、臥、ともに諸もろの苦悩を受く」つまり受胎後日常生活の全てを挙げて胎児本位に行動しておるために片時も苦悩の休まることがないことを示され、そのためには「常に好める飲食物・衣服を得るも愛欲の念を生ぜず」とあります。

これまでの生活が自分の趣向であったのが今では胎児のため良かれとのみ念い唯ひたすらに子供の安らかに生れることだけを思い巡らすのであります。

「月満ち日足りて出産の時至れば、業風（ここでは陣痛のこと）吹いてわれを捉し骨節ことごとく痛み、汗も膏ともに流れて、その苦しみは堪えがたく、父も心身を労し、戦き懼れて母と子のことを憂念す、親属のものも皆共に同様に案じ苦悩する」。

「子の生れ出るや、父母の喜び限りなきこと、貧女の如意珠を得たるが如し」、父母の歓喜のさまは貧棒人が宝の珠を手に入れたほどの喜びである。

「その子声を発すれば、母は自らが初めてこの世に生れ出た念いをなす」と出産時の両親の苦悩と歓喜の状態を説かれて余すところがありません。

「それより母の懐を寝処とし、母の膝を遊び場となし、母乳を食物とし、母の愛情を性命として、飢れば母に需め、母にあらざれば哺わず、渇するも母にあらざれば咽まず」。

「寒時に衣服を着せ、暑時の脱衣も母にあらざれば応ぜず」。

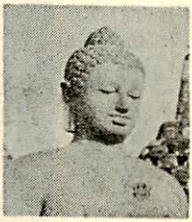
「母、飢に中る時も哺めるを吐いて子に与える、母、寒に苦しむ時も着たるを脱ぎて子に被らす、母にあらざれば養われず、母にあらざれば育てられず」

「その闥車（乳母車、ゆりかごと解すればよし）を離るるに及べば、十指の甲の中に、子の不浄を食う、計るに人々の母の乳を飲むこと一百八十斛となす。父、母の恩重きこと、天の極まり無きが如し」。

以上は平易に示されをおりますから、読めば判ることでありますが、表現の文字の中に含くむ親の愛情を自己の体験を想起して読んでいただきたいと存じます。ここまで書いて来ました私は自分の過去と反省の一端を述べずにおられない気持から貴重な紙面をさかせていただきます。

私は数え年五才の時に父と死別しました。それが苦難な人生行路の出発点となりましたが、このことによって仏法の縁が深まり七十七才となった今日、心の安らぎについて多少会得することができました。その以前少青年時代は狂人の如く自己本位に行動して、三毒、五欲に振り回されておりました。それが三十才に入って漸く目覚め始めて本来の僧職に専念して、布教所を開設しました。職掌柄不幸な場面に接します中に頑是ない子供さんを残して前途ある方が他界されました。然かもその前年に小学校に入って間のない長女の早世で悲嘆された折からのご縁で、仏教の話しをして幾分なりともお慰めをしております中に、ご本人が幾人かの子達と未亡人を残して逝かれた時は人事でなく自分の過去の再現として先立つ親の気持を察すると共に、今現に生きておるこの生命を与えられた慈悲に感謝の念を一歩深めることができました。維新の志士吉田松蔭先生の辞世、親思う心にまさる親心、今日のおとずれ何ときくらん。

以下次号



インドネシアの旅（其の四）

八十三翁
桐江

とりゐ　二十八号で、**ボロブドールの大遺跡**を巡拝した模様を略記しましたが、今より二千年前、大乗仏教が、アジアの北辺の日本と、南端のインドネシアに時を同じうして開花したのも、くしき因縁と云うべきであるので、是非巡拝したいと云う多年の念願が斯に達せられた事は、此の世の思出として有難い極みでありました。

古都ジョクジャカルタ

其の夜は、ジャバ島の中央の**ジョクジャカルタのパレスホテル**に宿りました。

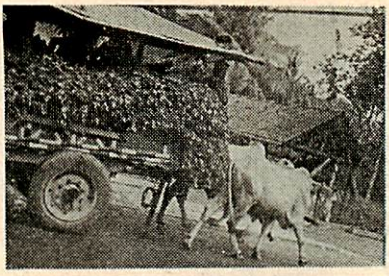
此処は、日本の京都を思わせる様な、サルタン（王都）で熱帯の美しい香の高い花の咲く樹木に蔽はれて居りまして、文明に荒されていないので、旅行者を喜ばせています。

市内にはまだ自動車が少なく「ペチャ」と云う三輪車がやりますし、バスはロバの車で南洋の古都の味がみなぎって居ます。

ペチャ（三輪車）には南国を思わせる極彩色の絵が一面に画い

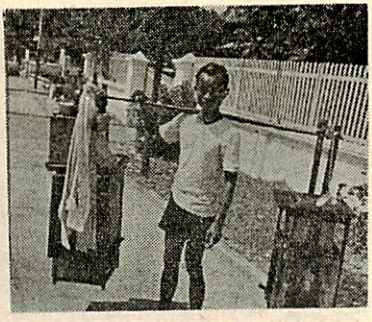
運転手が後方に居るペチャ（三輪車）

てあり、運転手が後方に居るので南国の花木、風物、露店、其他珍らしいものに出会えば、どこでも止められて写真をパチパチ写す事が出来るので、私等は三台に分乗して二時間ばかり町見物をしたのが最も楽しい思い出となりました。

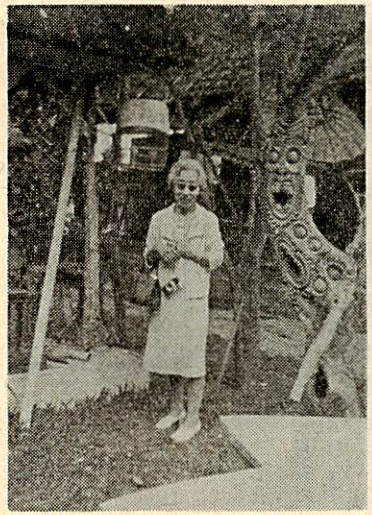


水牛やロバの車

又明治以前を思わせる様な、定斉屋(ジョーサイヤ)やキセルの羅宇(ら お)掃除に似た屋台店や奇抜な露店等皆珍らしく、自動車が少ないので、交通地獄から解放されて、久方ぶりの楽しみでした。



定斉屋に似た物売り

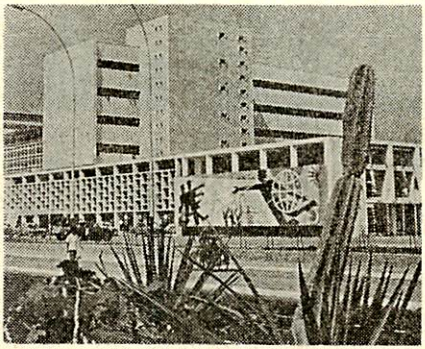


奇抜な露店

首都ジャカルタ

七月二十一日午後、飛行機でジョクジャカルタを出発、二時間でジャバ島の最西端のインドネシアの首都ジャカルタに着きホテルインドネシアに宿りました。

此のホテルは日本の賠償によって建てたもので豪華なものです。



日本の賠償で建てたホテルインドネシア

夕食の赤ゲット

明後日はインドネシアにお別れするので別れのパーテーをしようと十六階の国際大食堂に行った処、ノーネクタイはだめと断られたので部屋に帰りネクタイをつけて又行った処、八時でなければ始めませんと断られ、赤ゲットまる出しの失敗。まだ一時間以上もあるので待ちきれず、一階の大食堂でカクテル等飲んで盛大？な別れのパーテーを楽しみました。食堂の入口に、ワゴン（果物をうづ高くかざって運搬出来る台）が見事なので、ボーイに頼んだ処、車ごと運んでくれ十数種の果物をよりどり、目の前で料理してくれましたが、美味なのは五種類位であとは見かけは珍らしいが、あまりいただけませんでしたが、毎日油と胡椒の食事に閉口して居た私老人には久方ぶりの豪華ばんでした。

朝食の失敗

此のホテルでは朝食は、前の晩にメニューに注文の品に○印をつけて入口ドアーの外のノブにつるしておくのですが翌朝運んでくれた朝食は何と量が多くテーブルに置ききれず、ベッドの上までならべられ、食欲は全く減退してしまいました。

是は娘が色々と違ったものにやたら○をつけたためで十人分位もあったようです。外国旅行には此の様な失敗がよくあります。

首都ジャカルタの現状

ジャカルタはオランダから独立してより人口が急増し、三百万の大都市になりました。

其のため新旧両市街の差は甚しく、殊に過密都市として失業者が多く、家のない人口も百万を越して居るとの事です。

午前、**新市街**を見物しました。道路の中央には十米位の堀があり両側の土手には色々の形をしたネオンが並んで居り夜景は定めし美しいと思いました。家屋はオランダ式ビルが立並んで居るが自動車が東京以上に多く実に不愉快なので早々に町見物を中止しました。

旧市街は、バザール其他珍らしいものが多いとの事ですが時間がないため見物出来なかった事は甚だ残念でした。

雄大なトーケシア（象の家）博物館

トーケシア博物館は、インドネシアの凡てがよくわかり、見ごたえがありました。

インドネシアは、人口一億と日本と同じ位ですが、其の内六千万がジャバ島に集中しあと四千万人が六千もある島々に散在して居りまして、人種も言語も二百余種もある実に過疎で復雑な国がらです。そして三万年前迄は大陸と地つづきであったため、人種も文化も大陸から移住して居りまして、宗教もヒンズー教、回教、キリスト教の外、**精霊崇拝**が盛んである事は、各家々に椰子の葉の屋根の小さな祠（ほこら）が沢山あるのを見ても察せられます。

此の博物館で最も魅力があったのは、蕃人の家屋や生活状態の模型が数百種もあったり、又インドネシア独得の芸術味ゆたかな深山の彫刻や民芸品又は珍らしい武器、生活用具、楽器等、所せましと陳列してあり、あたかも蕃地深くさまよって居る錯覚を起しました。

ヒアク島で日本軍がすさまじい激戦の後山上の鐘乳洞で全員玉砕しましたが戦後遺骨収集団が其の地に建てた慰霊碑。

ヌムフォル族の杭上家屋

慰　霊　碑

ジャカルタの暴動と日イ両国の将来

此の記事を書いて居る時、田中首相がジャカルタの暴動に相遇しました。是れは、イ国内の思想、不平の外に、日本に対しては貧富、産業、工業の差やアニマルな日本人と、淳朴なイ国人の違い及び賠償に見る様に日本軍の占領政策に対する驚怖、其他多くの原因がある様です。併し資源のない日本と、地下資源の無尽蔵のイ国との深い因縁は好むと好まざるとにかかわらず、両国は益々合弁開発に突入する事はさけられず、自然いかに日本人が精神的に尽しても、人種偏見やイ国内の思想的動行により今回の様な暴動は繰返えされましょう。併し多くの未開発国が独立したり、スエズ運河や石油問題を思うにつけても永き将来には、持てる国インドネシアが産業の独立と国営化の野望を起す事がないとは云えません。併し其の後日イ両国交は、対等となり永久の平和となりましょう。

西遊記（其の二五）

岡部千三

そこで悟空は、れいりちゅう、せいさいきの二人の怪物に、声をかけた。

「おまえたちは、大分いそいでいるようだが、どこへいくのだ？」

二人は、目をたがいに見あわせて、

「おや、おや、道士さまは、どちらの方からおいでになりましたか？」

「わたしはな……蓬萊からきた仙人だが、仙術を伝えるために、その弟子を探しにきたのだ。どうだね、一つおまえたちは仙術をおぼえたいとは思わないか？」

「おぼえたいどころではありません。いまも、孫悟空と云うやつをさがしてつかまえようとしているところです。このようなときに仙術を知っていたら、どんなに都合がよいかと思います。どうぞ、仙術をおしえてください。」

「よろしい、ところで、そのひょうたんはめずらしいものだな。なんのやくにたつのだ。」

「悟空をいれるのです。名を呼んで、あいてがへんじをすれば、すいこむ力のあるふしぎな宝です。」

道士の姿にかわった悟空は、平然として、

「そんなものなら、こら、ここにもある。」

悟空は、頭の毛を一本ぬいて、ひょうたんにかえ、二人の前に見せた。

「このひょうたんは天をすいこむこともできる、ひょうたんだ、……よく見ろよ。」

ぽーいと、その、ひょうたんを空へなげ上げた。すると、きゅうに空がくもり、やがて、まっくらになってしまった。

「あれ、あれ、どうしたことだか、」と二人の怪物は、あっけにとられていた。

それは、悟空がじゅもんをとなえて、天上の玉帝にたのんだから、玉帝のいいつけで、ただ太子が黒

いはたをひろげて、太陽をかくしたので、くらくなったのである。
「ははは、おどろいたか、では、明るくしてやろう。」
悟空のことばが終るのと一緒に、ぱっと明るくなって、なにもかも、もと通りになった。よくの深い二人の怪物は、悟空のひょうたんが、ほしくなった。
「いかがでしょう。あなた様のそのひょうたんと、わたしたちのこの宝物と、とりかえてはくださいませんか、もしそうしてくだされば、あなたのでしになって、いっしょうけんめいに、はたらきます。」
悟空は、しめたとは思ったが、わざとつまらなそうな顔をして、
「どうもなァ、こちらがそんをするような気がするでなァ……まあよろしい。おまえたちが、わしのでしになるというのだから、それでがまんをしよう。ではとりかえてやろう。」
恩にきせたいいかたをして、ひょうたんをとりかえ、そのまますがたをけしてしまった。

二人の怪物は、きょろきょろして、
「道士がいない。仙術をおしえるといって、何にもまだ、おしえないで姿をくらますとはひどいな。」
「そうだよ。でも、このひょうたんがあればもういいさ、どうだい、さっそくためしてみようか。」
ぱっと空へなげ上げたが、空は明るく、日はきらきらかがやいて、いっこうにくらくならない。
「これはおかしい。もういちど……」
やっぱりだめだ、何度やってもおなじことだった。
「しまった、これゃァ、だまされた、仙人というのはうそで、さては、あれが孫悟空だったのか。」
「宝ものは悟空にとられてしまったし、こんどは、おれたちが、いのちをとられる番ではないか。」
二人は、こわごわ、れんげ洞へもどっていった。
そのとき、せいさいきの肩に、悟空のばけた小さな虫がとまったのには、二人とも気がつかなかった。

孫　悟　空

かえってきたけらい二人の話をきくと、金角は、

火のようにおこって、
「おまえたちが、うすぼんやりだから、悟空に、やられたのだ、もうかんべんできぬ。」とわめきたてた。
「まあまあ、今さらおこってもしかたない。宝ものは、ほかにもある。まほうのなわで、悟空を、ひとつとっちめてやろうぞ。」と、銀角になだめられて、やっといかりをしずめた。
まほうのなわというのは、じゅもんをとなえると、うごきだす、ふしぎな力のあるなわで、金角銀角の母親のところにあずけてあった。
「ごちそうをするから、まほうのなわを持っておいでくださいといって、母をおつれしてくれ。」
銀角は、けらいにいいつけた。
すると、これをきいた悟空。けらいの怪物がまほうのなわをとりにいくのを、とちゅに、まちぶせしていた。
「こら、まてっ。」と声をかけ、ふりむくところを、如意棒で、がんと一うちにした。
そして、自分がけらいの姿に早がわりして、怪物の母親のところへいそいだ。
「れんげ洞からまいりました。旅の坊さんをつかまえたので、お祝いのごちそうをいたします。まほうのなわをもって、すぐおいでくださいとのことで、おむかえにきました。」
ごちそうときいて、怪物の母親は、大よろこび、まほうのなわをふところにおしこみ、いそいそと、かごにのり込んだ。
「ごちそうというのは、どんなごちそうかね。」
母親は、かごの中から、悟空にきいた。
「あててごらんなさい。」と、悟空は、しらばくれていった。
「たぶん、旅の坊さんだろうよ。かんがえるだけでもおいしそうで、つばがでてくるよ。」
「ばかをいうな。たべられてたまるか。」
悟空はおこって、如意棒で怪物の母親をたたきふせてしまった。母親は、ぱったりたおれ、きつねにかわった。
「ゆっくりねてるがいい。」

ま法のなわをとりあげた悟空は、あたりを見まわして、ぱっと身をひるがえすと、今度は、母親にそっくりの姿にかわった。そしてからだの毛をむしりとって、大勢のけらいもつくった。

「いそげ、いそげ。れんげ洞へ走るのだ」

えっさ、ほっほ。えっさ、ほっほ。にせもののけらいのかついだかごは、やがて、れんげ洞についた。

「おかあさん、よくおいでになりました」

金角と銀角は、門までむかえた。そしてにせものの母の手をやさしくとるようにして、ほら穴の中へうやうやしくあんないした。

悟空は、ますます、すまし返って、法師はどこかなと、注意深くあたりを見まわした。すると、

「大王さま、たいへん、たいへん。いちだいじでございます」と、一人のけらいが、いそがしくとびこんできた。そして、金角の耳に口をよせ、何かこそこそとささやいた。

金角の目が、いかにも怪物らしく、ぴかぴかと光って、銀角に何か耳うちをすると、銀角の目もするどく光った。光る四つのあやしい目が、悟空に向けられた。

「これはいけない。どうやら、おれが母親にばけてきたのを見やぶられたらしいぞ。ええ、ままよ……こうなったら、もう仕方がない。たかのしれた怪物の金角、銀角め、このへんでひとあばれして、こらしめてやるとしようか」

悟空が、例の如意棒をとりだすのが早かったか、金角が七星剣をぬきはなったのが先だったか、どっちともいえない早わざで、向いあって、ちゃりん、がっしと、うちあいながら、悟空はわざとほら穴の外へかけだすのを、金角が、そのあとを追いかけようとすると、

「おいおい、こんどは、おれの番だ、おれにまかせておけ」と金角に代って、銀角がむかっていった。

悟空は、心の中で、さて……と考えていた。

「銀角め。むちゅうで向ってくるが、こちらは、ま法のなわがあるのだ、よしこれをつかってやれ」

以下次号

田舎医者（其の十）

見川鯛山

挿絵　おおば比呂司

赤い三角布

と、そこに石ころがあった。オートバイがそれにぶっつかって、大きく跳ねると、直二は円い弧を画いて空高く舞いあがり、そしてよつんばいに落ちた。

「なあに、これくらい大したことねえさ。一寸、サーカスやってみただけださ」

起きあがると、彼は娘達に云った。だが、顔の真中がすりむけて、紅しょうがのように真赤だった。

「俺、運動神経いいのさ。だから、こんなふうになっても、怪我なんかしないのさ」

と、鼻の赤い直二がにこやかに笑ってみせて、汚れたズボンの埃をたたくと、右腕がコンニャクのようにブランブランゆれた。その折れた腕を見て……直二はその場に失神した。

間もなく、ハイヤーで直二が運ばれてきた。彼は折れた腕を左手で抱きながら、もうすっかり元気になっていた。

「真中から折れてるな」

私が云うと、直二がけろりとして云った。

「そうだっべ、俺、落ちる瞬間から、こりァ折れちょうなってこと解ってたのさ。だけどそばに娘達が大勢いたし、心配させちゃ拙いと思ってよ。俺、しばらくいたのさ」

「ほう、それは偉い、よく我慢できたな」

「それゃそうさ、俺、人気もんだも。人に泣っ面みせれねえべさよ」

と、強そうに胸を張ったが、腕が動いて、額を痛

そうにしかめた。
「さすが、いい度胸だ、じゃァそろそろ整復する。ちょっと引っぱるから我慢しろ」
「引っぱる?」
大声をあげて直二が訊いた。
「そうだよ、引っぱって骨を元の位置にもどすんだ。さ、いいかね?」
私が腕まくりしたら、それを見て、真二がまたもや仰向きに倒れて失神した。

人気ものの直二が怪我をしてから、そろそろ二ヶ月になる。だが彼の骨折は、まだギプスがとれない。右腕の真中がポッキリ折れたまま、それが化骨しないのだ。私がさかんに気をもんでいるのに、ご当人はまるっきり平気のようだった。
今ではもう、私が掛けてやった白い木綿の三角布なぞ、とっくの昔にどこへか捨てて、その代りに、彼は赤い柄のはでな絹のネッカチーフを三角に折って右腕を首から吊っている。しゃれ者の直二には骨折もアクセサリーみたいで、それがとてもよく似合うのだ。
「もういい加減になってもらわないと、私がますますヤブ医者だと思われるな」
私がため息をついて云うと、
「なあに先生、気にすっことねえず。別に急ぐことねえすから、この方が百姓休めてなんぼいいか。それによ、俺、百姓のせがれにしちァ骨が細すぎるんでねすか? ことによっと、俺、鬼っ子かも知んねえすな」
私が何か云ってやろうと、口をモグモグさせたら、彼の方が先きにしゃべりだした。
「まァなんだな、俺の骨くっつかねえでも、慌てっことねえすな、いずれ治るですもんな。それに、ここじゃ、医者は先生だけですべ、だから仮に、仮にだぞ先生、誰かが先生こと、ヤブだと云ったってみんな誰でもここさかかりに来るですもんな」
直二くらいの年だと、前膊(ぜんぱく)の骨折は五十日で完全にくっついてしまうのだが、彼の場合は、その接合

が悪く、ことによると、肘や手首みたいな関節がもうひとつ、腕の真中に誕生しそうだ、仮関節という奴である。原因は、私の整復術の失敗か、骨そのものに病気があるのか、又は患者の不摂生によるものか、そのいずれかにあるのだ。

私は煙草の煙を天井に吐きながら、ずうっと考えていた。

私の整復や治療に、落ちどがあったとは、どうしても考えられない。そうかといって、直二のおふくろさんが町でなにかやらし、そのために彼の骨に毒があるとも思えないのだ。

すると、残るもう一つの原因は？

ぽたっと、ピースの長い灰が、音を立ててズボンに落ちた。はっとして私が彼にきいた。

「おまえ、このピース、パチンコで取ったと云ったな？」

「ああそんなもん造作ねえす」

「パチンコ、左手で出来るのか？」

すると直二が、せせら笑って云った。

「馬鹿だな先生、左じゃァ出来るはずねえすよ。こっちの手で、こうするんですだ」

と、赤い三角布で吊った右手の親指を、トンボの尻のように、ピクピクうごかしてみせた。

「パチンコの前さ立つと、この指がいい塩梅に引き金の所さ行くだ。その上、こうして吊ってあっから、何時間やっても腕がくたぶれねえで、まことに具合がいいす」

と、彼がすっかり白状した。

原因はそれだ、私もそうだが、直二のおふくろさんはもっと安心するだろう。

祝賀会

朝の外来患者をすませると、私は池沢部落の公民館落成祝賀会へ出かけていった。

青いトタン屋根で、モルタルを塗った木造の白亜館が村いちばんの近代文化を誇って、田圃の原っぱに建ち、そのまわりで桃が満開だった。那須高原は今や春らんまんである。

（以下次号）

寄進者芳名

昭和四十九年二月現在
敬称略

壱万体観音

BA 一万円
七千円

住所	氏名
所沢	粕谷 英一郎
〃	岩岡 又四郎
〃	豊田 実
〃	萩原 登喜男
〃	外一体
〃	仲 辰雄
〃	新藤 武三
〃	木下 幸三
〃	室岡 てふ
〃	外一体
〃	萩野 ヨシ
所沢	森田 善三郎
〃	外一体
〃	磯谷 正一
〃	外一体
〃	田口 照雄
〃	外一体
〃	青木 福治
〃	西村 晃治
〃	外一体
〃	平田 善七
〃	小畑 暗彦
所沢	小達 民一
〃	山崎 栄一
〃	三上 庄一
〃	増村 掌（とおる）
〃	大舘 寿衛吉
〃	田代 隆知
〃	粕谷 幸平
〃	鈴木 福子
〃	栗原 康江
〃	村松 勝
〃	工藤 源一郎
東村山	水谷 睦啓
古名屋	小久保 真助
富士市	山田 秀雄
麻布	大沼 政吉
大田区	増田 彰重
浦和	戸塚 俊夫
横浜	清水 勝次郎
大宮	横溝 甲子夫
日高町	斉藤 秀利
毛呂山	森 進
柏市	北川 休
新座	鈴木 良雄
浦和	斉藤 勝
大宮	平田 進
東京	坂本 よし
横浜	浜田 弘之
藤沢	井面 利博
練馬	藤井 好男
新宿	藤井 俊道
東京	千々松賢四郎
所沢	千秋 さと
藤沢	鈴木 喜兵衛
鶴ヶ島	藤田 ツヤ
〃	原田 キヨ
鶴ヶ岡	青山 貞男
毛呂山	深田 太郎

葛飾　加藤静枝
静岡　禅太応　練馬　板橋
中野　富山とみ　中野　〃
福生　今村勝二　〃　名栗
大宮　小林儀一　丸谷重理　柿沼丑五郎
大阪　二宮源男　丸谷好明　柿沼洋次
長谷川昭
狭山　窪田五三
福生　武藤信一
東村山　広浜徳太郎
足立区　大森譲子
池袋　炭田一実
練馬　岡田ナホ
朝霞　比留間源次郎
板橋　富永昇
外一体
大田区　尾作徳治
藤沢　成清静子
田端　遠藤ミヨ

壱万巻写経　壱巻　千円

一〇三　国府方金佳
一〇〇　平沼弥太郎
六〇　小川文雄
四〇　田辺さわ
二五　橋本国男
二一　平岡くに
二〇　平沼とみ
二〇　林菖蒲
一七　渡辺陽夫
一四　塩入花子
一〇　宮川澄夫
一〇　野村喜好
一〇　岡部錦子
一〇　徳永タミ
一〇　藤田栄一
一〇　宮川澄夫
一〇　田島徳子
一〇　加藤惣一郎
八　鈴木雄三
七　田島静子
七　清水フジエ
七　霜田義久
六　平岡正夫
六　沢田ユウコ
六　斉藤定次
六　鈴木玉代
五　小沢昇
五　長みね
五　石村清子
五　藤間栄一
五　藤間八重子
五　橋本六郎
五　小沢秀宣
五　小笠原忠次郎
五　鈴木晃子
五　清水喜代子
四　加瀬良子
四　西村晃一
四　宮原兼一
四　斉藤よ里
四　杉野彪
四　平岡豊子
四　南波福禱
四　伊藤香枝
四　平沼澄子
四　寺坂亮一
三　平ハルヨ
三　後藤のり
三　広瀬正子
三　林とみ子
三　小俣美津子
三　児玉亘
三　広瀬秀雄
三　三木和夫
三　平岡きくえ
三　小沢美代
三　辻村真名子
三　平沼宏三
三　滝口常右ヱ門
三　広瀬千恵子
三　宮田光子
三　平岡佑子
三　荻島絹子

第十五集
計　A　八三
累計　八、三六九
内訳　BA　一、九一六　六、四五三

第四集
計　一、七四六
一巻　五二五
二巻　五二八
三巻以上　六九三
累計　七、〇一六

境内参道大灯籠

昭和四十九年一月末現在

壱基　所沢市　肥田野孝
壱基　所沢市　森田米十郎
壱基　所沢市　新井富次郎
壱基　練馬　坂本喜太郎
壱基　所沢市　指田和生・西沢富久寿
壱基　所沢市　北田加納・小暮雅雄・小暮博亮
壱基　所沢市　所沢観音講北中有志・萩原登喜男
壱基　所沢市　所沢観音講北中有志

申込合計　三十七基

鳥居観音だより

終たっ行事

昨秋は十月から十一月まで、紅葉まつりを計画して、チラシも印刷して、各方面へ配布もしました。最近当山の紅葉美しくなって来ましたので、毎年参拝がてら来山の方が多くなりました。

秋季例大祭

十一月十七日、十時三十分、開祖平沼先生ご夫妻を始め、浦和講の藤沢、関、宮崎の三氏の引率で、六十名の団参、東京福徴講、新妻、大沼、目黒の若林、埼玉トヨペット講梶谷、坂戸、平井、地元役員の諸氏のご参列で、盛大でした。特に平沼先生からのごあいさつには一同感激なさいました。

紅葉の盛りは過ぎたと云った感じでしたが、中腹から上は、美しくて、皆様によろこばれました。

十一月十八日、所沢市で篤信者小山様外十五名と川崎の宮田、東京の江端、佐久間両氏来山

十一月十九日、御嶽教管長渡辺照吉ご夫妻を、吾々御嶽神社の鴨下殿と地区役員のご案内で来山、くまなく見学参拝されました。

十一月十九日、川越霞ヶ関小の四年生三〇〇名が社会科学習で入山、山も川もない所から来たので、一同目を見張りました。

十二月四日、週刊埼玉タイムズの三浦氏が、六時朝日にかがやく大観音の撮影のため入山、撮影。

十二月二十日、入間市講元粕谷とし様を始め、川越、狭山、所沢、飯能、秩父、坂戸、加須、浦和、埼玉トヨペット講から、新年祈禱の申し込みがあり、千二百五十枚に達しました。

十二月二十二日、十時より平和観音の起工式を現地の奥の院見晴らし台に於て、小林老師の謹修によって挙行いたしました。請負者の三信工業から小林外二氏、観音から執事外職員参列して、午前十一時三十分終了いたしました。

元旦祈禱会　一～三日

一月一日、新春の空は日本晴で、珍らしい静かな元旦でした。

年末各方面の役員様お世話人各位のご協力によりまして、お申し込みいただいた、祈禱は本堂ご本尊の前一ぱいに並べられました。

定刻には毎年必ずご参拝いただく方々で、川越から原田、森田、栗原、吉永、中島、斉藤、福岡、矢口、東京から、堀沢、佐藤、志賀、青梅から小峰、荒井、飯能から平沼、所沢から小山、名栗、浅見、岡部、平沼、坂戸の平井の諸氏がご参列になり、厳しゅくに執行いたしました。

ガソリン不足が伝えられている折から、参拝者はどうかと、気づかわれましたが、午後になってからマイカーでの参拝がありました。

一月二日、恒例の参拝者川崎の宮田様、川越の斉藤様、所沢の小山様等祈禱札を受けに来山、前日に引つづいて静かな天気でした。

一月三日、朝霞の広瀬様来山、大観音にて、しばらく読経なさいました。

本日を以て祈禱札の配送は終りました。

一月六日、三信工業株式会社、服部雄次様来山
一月七日、彫刻家　福士勝夫様来山
一月十三日、飯能市、お一人で写経百二十巻を奉納なさった小川文雄様ご一家初詣で来山。本堂読経
一月十五日、成人の日、晴着姿の善男善女の参拝が目立って、小正月の気分がただよいました。
一月十九日、東京の江端、佐久間のお二人外十二名様来山、次ぎの品物が奉納されました。

○日本百観音巡拝結願成就絵馬扁額

江端様は観音信仰では自他共にゆるす方で、当山には年に数回も来山されます。

江端さんは先年意を決して、日本百観音を巡拝されて、各寺から一枚一枚絵馬に集印、遂に結願を成就されて、扁額となし奉納になったのです。

本堂に向って右側正面に掛けられました。

これから、当山に参拝の方は、日本百観音も共にご参拝になれるわけで、幸のことと思います。

この日江端様と共に信仰厚い佐久間様から、次の品がご奉納になりました。

○般若心経　百観音奉拝帖

佐久間真治様は、般若心経を浄写された奉拝帖に、百観音の集印をなさって、結願成就したので、奉納いたされました。

○一万体観音と大灯ろうの勧進に協力している人

一月三十一日、所沢市小山権之丞様来山、壱万体観音三百体と参道大灯ろう二十基の勧募実数の報告を受けました。

小山様は信仰を通じて、常に知人とか友人に当山へ協していただくべく、寸暇をおしまず呼びかけて来られたのでありまして、並々ならぬお力には感激の外ありません。

花のお知らせ

彼岸を過ぎると、万物皆よみがえります。境内の花木は、数万と云われています。沈丁花、白梅、紅梅、れんぎょう、雪柳は三月末から咲き始めます。

紫の三葉つつじは、四月上旬から全山に亘って咲き、その満開の頃は花の紫が煙るように乱れ咲い

て、山内の遊歩道を歩きながらゆっくり探勝すると、まさに別天地の感無量です。

四月下旬になると、山内の椿、山吹、山ざくらが点在し、萠え出る木々の若芽は水鳥の胸毛のようにやわらかく、銀ねずや萠黄色が見る瞳を和らげます。

又紅つつじは陽に映えて燃えるように、咲き展がって五月の中旬まで見られます。

そして新緑が深まってくると白い朴の花のよい香りが遊歩道まで漂います。

この頃本堂入口の藤棚の藤が花を開いて月末まで咲きます。

行事その他

二月　三　日　節分祭　午後三時本堂福袋分与
二月十五日　釈尊涅槃会　午前十一時　本堂
三月春彼岸　二十一日　午後一時念仏会
四月十七日　春季大祭　ご詠歌奉詠
午前十時三十分から本堂、玄装三蔵塔　大観音と順次法要を進めます。花の真盛りとなる好季となりますので、御参拝かたがたご探勝ください。

五月八日　花まつり（月おくれ）本堂に花み堂をかざり甘茶を用意いたします。

七月十六日、塔婆供養、ご先祖始め諸霊の塔婆供養をします。どうぞご参加ください。

一、供養料　一塔婆　一、金　壱千円

お申込用紙は寺務所にあります。

その他

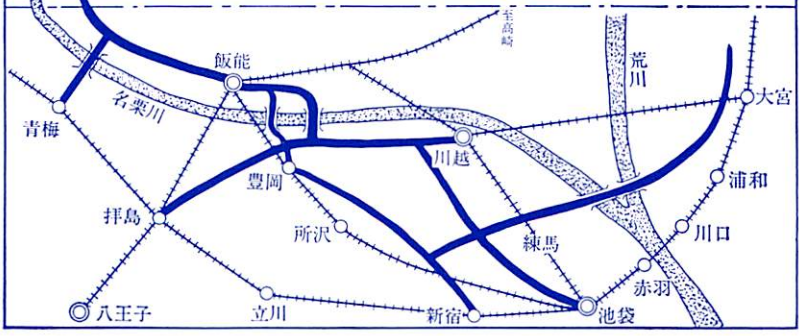
祈禱……申込用紙は寺務所にあります。願旨記入して、申し込むと何時でも祈禱いたします。

勤行……毎日午前十時～午後三時　読経があります。ご参拝の方はご一緒に読経してください。終了後ご法話があります。

とりゐ　第二十九号　発行日　昭和四十九年四月一日
編集兼発行人　埼玉県入間郡名栗村　鳥居観音　岡部　千三
印刷所　浦和市仲町二―八―十五　武州印刷株式会社
発行所　鳥居観音電話〇四二九七〇四　名栗二七五番

白雲山 鳥居観音 観世音センター 案内図

琴比羅神社
棒の峰
秋葉山
有間渓谷
納経塔
面白岩
三蔵塔
平和観音
白雲橋
見晴台
教世大観音
休憩所
大黒殿
自動車道
蛇の目型四阿
観音滝
子育地蔵
トーテンポール
玉華門
仁王門
梅月楼
梅晩の墓
諏訪神社
稲荷神社
炭谷川
鳥居文庫
本堂
庫裏
観世音センター
ますつり場
鳥居観音入口
水泳場
秩父峠
至正丸



つつじまつり
4月1日より
5月31日まで
写真コンクール等が催うされます